

令和七年八月 国立劇場第一七八回舞踊公演

刀剣男士 髭切・膝丸がいざなう！ 日本舞踊の楽しみ

『土蜘蛛』

【前場 源頼光館御殿】

〜浮き立つ雲の行方をや 浮き立つ雲の行方をや 風の心に任すらん

金時 コレサ貞光、大切な宿直とのいをしながら、さてもよう寝るぞ。

貞光 イヤサ金時、あんまりそなたがコクリ、コクリと寝るから、俺も  
うってやったものよ。

金時 したが貞光油断すまい。御主君頼光公、このほどより御心地れい例な  
らず、妖怪変化ようかいへんげの障りさわあり。

貞光 その御いたつき平癒のため、源家重代の祭神たる、かのタケミカ  
ヅチの刀神。

金時 かしこく祀り我々も、付喪神の現し身たらんと。君と宝剣守らん  
為、しっかとお勤め申さにやならぬ。

貞光 しかし今宵に限ってこのように眠いというは、のう金時

金時 オオサ、こんな時には濃茶が一服、

両人 飲みてえものだなあ

切禿きりかむろ

〜切禿 都育ちか京人形 ちよこちよこ歩む後ろ紐 お茶の通いのにこ

にこにここと 合点 合点 潮の目 かぶり振り振り 振らぬ間に 摘

みておけとは 梅尾山の 春の若草 茶の木のことよ ちゃちゃに浮

かして やっこのこのこの お茶参ると 差し出す

金時 やコリヤ、良い所へ持つて来た。

貞光 イヤアついに見慣れぬ童だが、わりやどこから来た。

金時 そは誰人の子なるぞや

切禿 さればいな

〱お月様いくつ 十三七つ 〱雲かかれば 〱風をもつて吹き払う 〱大千世界はさていかに 〱オオそれこそは凧のぼり

〱天の岩戸に隠れんぼ 今に伝えて神国の 子供遊びとなりにけり 〱雛の祭りは 〱嫁入りの手習い 〱幟兜や菖蒲打ち 菖蒲刀は いかに  
いかに 〱それは武芸の始めなり 駒の手綱を これこれ こう取つて  
〱天晴れお馬の 〱上手と 〱上手が 〱乗ったか 〱乗ったぞ 〱しと  
しとしと 〱それぞれそれと 〱化生けしやうはたちまち頼光の 寝所をめが  
け入らんとす

〱こは心得ずと金時貞光 支え止むる袖袂そでたもと かいくぐり かいくぐり  
〱ここに現れ かしこに失せ 業通自在のその振る舞い  
〱やあ小癩など無二無三 〱一度に刀抜き連れて 払えば 〱後ろに  
〱有明の 突き止めんにも居もためず 狙いもためず切髪の 〱姿は消  
えて 失せにけり

金時 エエ忌々しい、今の化け物。

貞光 討ちもらしたか、残念だ。

金時 この様子では油断ならず。なお怠りなく宿直の続き。

貞光 それにつけても不覚の睡魔、何と目を覚ます仕様はあるまいか。

金時 オウあるぞ、あるぞ。究竟くつきょうのこの碁盤。

貞光 眠気覚ました。

〱黑白二つの石を分け 互いに争う先手後手

〱夢ともわかずうつつとも 影のごとくに忽然と

### 座頭ざとう

〱オンオンオンオン 自体それがしは奥州おうしゅう者で 三味も弾きます 諸芸

も上手 ヨオイヨオイ ヨイヨイヨイヨイ アリヤリヤ コリヤリヤ

ハア何でもせ 〱オンオンオンオン 杖を力に都の町を めぐりめぐ

りて浮かれ座頭の坊

金時 いずくともなく見慣れぬ座頭

貞光 イヤ、貴様は近ごろ噂の、都を流す奥州座頭だな

金時 幸いの眠気覚まし、お国名物の仙台浄瑠璃じょうるりが、

貞光 聞きたい。

両人 聞きたい。

〱イヤハヤそう せちにぎやアらば 帰りがけの駄賃だ ハア

〱心得たりと 背に負うたる三味線の撥ばちもしどろに弾きならし

〱これはさておき ここに漢の高祖の臣 樊噲はんかいという強者一人 おわし

ますとな思しめせ 〱主君の帰館を迎のため 鎧兜に身をかため 〱さ

て鉄門に着きしかば 踏んばたがってどき声あげ 主君の迎に樊噲が  
でばったてば 門の開け 門の開けと 呼ばわったり への樊噲が  
力の程 ゆゆしかりともなつかなか と申すばかりはなかりけり

へ怪しや 今まで座頭と見えしは忽たちまちに 両眼見開き頼光の 一間を  
めがけ伺い寄る

へ金時貞光 シヤさてはこやつも変化よな 手捕りにせんと大手を広げ  
ここの隅々かしこのつまり 陽炎稲妻石の火の 消えて姿はなかりけ  
り

金時 いままた希けう有なる座頭の有様。

貞光 魑魅魍魎ちみもうりようの所しよ為なるか。

### 傾城けいせい

へ月清き夜半とも見えす雲霧の かかれば曇る心かな

頼光 ヤヤそなたは薄雲。

薄雲 頼光様、怖い夢でも見なんしたかえ。

へ身は幻の憂き勤め 今日けふは東の客になれ 明日あしたは筑紫つくしの人を待つ 引  
く辻占はささがにの 蜘蛛の振る舞いかねてより 千筋に濡れて花の  
雨

薄雲 見れば見るほど美しい……、その反りようがゆかしさに。

頼光 シヤさても怪しき恋の網。

薄雲 ア、もし。

〜様に逢う夜の こい口は 笄こうがいさして帯とりて ころろ責き金 むね  
しのぎ 清さやかなかごじやないかいな さいな そんなれもよう言うた  
さいな そんなれもよう言うた

〜離れぬ仲のかこち事

頼光 深く馴染みし、傾城薄雲と思いに、火影にうつる怪しき姿、た  
だしは化生の業なるか。

薄雲 我が背せこ子が、来べき宵なり細蟹ささがにの。

〜千筋の糸に五体をつづめ 身を苦しむ化生と 見るよりも 枕にあり  
し膝丸を 抜きひらき 丁と切れれば 〜〜そむくるところを 〜〜続けざ  
まに 足もためず薙ぎ伏せつつ 得のたりやおうと罵のる声に 形は消  
えて失せにけり

頼光 さてこそ曲くせもの者。ありあり見たり、蜘蛛の影。エイツ。

〜御声高く聞こえければ 御寝所こそ気遣わしと 金時貞光打ち連れ立  
ち

金時 怪しの変化、毒牙の様子。

貞光 我が君には、お心確かに。お持ち

兩人 遊ばされましょう。

頼光 オオ兩人の者。来たりしか。さても今宵、いづくともなく傾城の訪れきて。

〽我に千筋の糸を繰りかけしを 枕刀手早に取り 切り伏せつるが手応えして 化生はそのままかき消すように失せぬ

金時 さては最前より我々を、なぶり悩ます妖怪なりしか。

貞光 今宵も君の御寝所間近く。忍び来たりし怪しの足長。

頼光 急ぎて退治あるべしや。

金時 館の隅々くまなく詮議せんぎ。取り押さえて生け捕りにせん。

頼光 その打ち物にはこの宝剣。

頼光 オオ今よりは、この膝丸の御剣を、蜘蛛切丸と名を改め、急所を刺して討ち取るべし。者ども、はや行け。

兩人 ハハア。

〽宝剣携え主従は あとを 従うて

【後場 同じく源頼光館御殿】

頼光 我に障礙しょうげをなさんとする、奇怪至極の変化の振る舞い。そもまずおのれは。

三人 何やつなるぞ。

〽汝知らずやその昔 葛城山かつらぎに年経たる 土蜘蛛の精魂なり

頼光 さては蜘蛛ちぢゅうの精なりしか。

金時 神風の吹く大日本。

貞光 汝らごときの障碍にあおうや。

へ土も樹も我が大君の国なれば いづくに鬼の宿るらんと吟ぎんじ給い

土蜘蛛 その君が代を妨げて、この日の本を魔界になさん。細蟹は玉の緒  
ならん白露の。

三人 なにを。

へ大勢崩すや蜘蛛網の 千筋の陰よりも 土蜘蛛の姿現したり

へしかとはいえども神国の 王地の恵みを頼み かの土蜘蛛を中に取り込

め 剣の威徳に依って悪蜘蛛を 退治まします弓取りの

へ世々に伝えて

※上演に際し、歌詞に多少の異同が生じる場合があります。あらかじめご了承ください。  
※無断転載を禁じます。